硝子の石碑

ある日、若者たちが浜辺に遊びに来た。
砂浜には、砂に紛れてキラキラと光るものがたくさんある。
白、青、緑、赤、ピンク、黄、茶・・・
そこには潮に揉まれ角が削られて丸みを帯びたシーグラスが
様々な色で輝きを放っていた。
若者たちはそのシーグラスを集め、浜辺に設置された石碑に
積み上げていった。
幾重の時を経て見えてきたのは、ステンドグラスのような
美しい輝きを放った硝子の石碑だった。
それはかつて人のコントロール下で生成された硝子が自然の中で
野生化した最期の姿だった。

若者たちは硝子の石碑の向こうに
掠れて見える都市を見て憶うのであった。

０１．人が作り出したものは最期は人の手で

様々な工業製品が製作されるようになり、本来であれば自然界には存在しなかったものが地球上の至る所で見られるようになった。これは工業製品が人のコントロール下から逸脱し、制御しきれなかった結果である。硝子もその一種である。人が作り出したものは最期は人の手できちんと回収したいものだ。それは機械的ではなく、あくまで「人の手」で回収する必要がある。

０２．美しいと思っていたものは若干皮肉的なものだった

硝子の石碑にシーグラスを積む行為は、人間に例えると納骨に当たると考える。自然の中で揉まれた硝子の最期の姿がシーグラスである。そのシーグラスが再度人の手で美しさを取り戻すために時間をかけて納硝子を行い、硝子の石碑を建てた。これは皮肉さを纏いながら硝子の色や石碑の数によって、各地に固有の空間を生む。

０３．次世代に主張・発信していくのは若者だ

現代社会において、若者の SNS による情報発信は切っても切れないものとなっている。その発信力と影響力は凄まじいものである。それは全て、その場に行くことや手に取ることで SNS に共有される。彼らが美しいと思い発信したものは、同時に皮肉さを発信するものとなっていた。硝子の石碑は、自然が作り出した美しさと、人々の皮肉さを縫合した象徴として次世代に発信していく。

NEG0086_1